



活動レポート

東京大学大学院附属水産実験所『浜名湖をめぐる研究者の会』参観

12月5日（土）、附属浜松中学校の生徒11名が東京大学大学院附属水産実験所を訪問し、同日に開催された「浜名湖をめぐる研究者の会」に参加しました。この会は今回で24回目という歴史があり、大学の研究者だけでなく、自治体、民間の研究機関、高校の生物・科学部、在野の研究者が、日頃の研究成果を21のテーマで発表しました。研究内容は、自然環境、環境を演出する生物、さらには人間活動を含めた地理的なものまで、バラエティーに富んだ内容でありました。

<参加者レポート>

1. どんな点を学んだか

- ・佐鳴湖や浜名湖、ダムなどの現状と共に生き物の多様性や今後私たちが考えていかなければならないような問題があるということに気づくことができました。
- ・水産資源という小さなくくりの中にも、様々な研究対象があるということが分かりました。魚や水場についての研究は、少し難しいけれど、とてもおもしろく学べるということがたくさんあるということと、水産資源と地球は調べると共通しているところがあるということを知ることができました。
- ・今回、浜名湖のすぐ近くに設置されている東京大学水産実験所で開かれた研究発表会で、今の地球環境を守り、よくしていくという目標をもとに、研究者たちが様々な研究を行っているということが分かった。今の世代の人たちは、地球環境に悪影響をおよぼすようなバーベキューや不法投棄などをあまり重く考えていないような気がする。その中で、よくしようと研究を続けている人たちもいて、科学の力は地球を良くしてくような力に貢献できているという点を学んだ。また、発表の中では、高校生たちのリンの出所の研究を見て、高校生でも研究を行うことができるということを知り、大人だけが活動しているわけではないということも学んだ。
- ・浜松の自然、主に浜名湖、佐鳴湖についてポスターで分かりやすく書かれていてすごいと思った。最後のフグの種類はうろことおなかで違いが分かることにびっくりした。
- ・浜名湖の魚体数の変化やCODなど、今後の河川、湖、海などに重要なこと。
- ・私たちが普段気づかない所で問題が起こっている。またそれを解決するためにどうすればよいかを研究し、その問題と真剣に向き合っている人たちが沢山いるということを知った。私

たち1人1人の行動で環境が変わり、自分たちに影響がきてしまう。よく考えて行動しなければならない。

- ・浜名湖にかかわりのある、魚や、生物、川などのことを聞きました。その中でもトラフグとマフグの違いがおもしろかったです。それはトラフグには、はりがあってはんてんが大きいです。でもマフグには、はりはなくはんてんが小さくなっています。なので、始めて知ったことばかりでした。これを研究していたのは韓国からの留学生でした。このような考えたこともないようなことがたくさんあったので、このようなのも、どんどん興味を持ってやっていきたいです。

2. 感想

- ・専門的な科学の研究発表を自分の目で見ることは初めてだったから、とてもかけがえのない貴重な体験となったのではないかと思う。本格的なものであったから。自分にはなんの事か全くもって分からないこともたくさんあったが、そうであったからこそ様々なことを知ることができたと思う。また、科学者たちが集う場の雰囲気はこの身で感じることで、自分にとっても新鮮なものになった。学ぶことがとても多い1日になった。
- ・様々な研究者の方々の発表を聞いて驚きました。水産資源について深く知ることによって何が分かるのかと疑問でしたが、何が分かるのかよく分かりました。
- ・まず最初に思ったことは、海、湖に関する研究でも、環境について考えた研究から海の中の生物の数などさまざまな分野で活動していることが分かった。しかし、これらの研究も、最終的には環境へとつながる研究が多く存在し、おもしろい研究だと思った。多くの研究者たちが、浜名湖や佐鳴湖の水質について研究を行っていて、このように科学の力を駆使して研究をしてくださっている人がいるのならば、自分たちも水質汚染を無くし、よりきれいな水を目指して協力し、努力しなければいけないと思った。そのために、自分たちは海や湖でのポイ捨てを禁止させ、海辺に落ちているゴミを拾うような活動が、一番僕たちに出来る活動だと思った。そうすることによって、海に生息する生き物はより快適に安心して暮らせると思う。人は何か失敗してしまったら、自分達でもとに戻す。暴走させてしまった科学で未来をよりよくするかは、僕たちに託されていることを実感した。
- ・中学生にはまだ難しい話と思ったが中には高校生が発表していて何年かたったらできるんだということが分かった。また機会があったら行きたい。
- ・浜名湖をめぐる研究者の会にあってよかったと思う。それで浜名湖や佐鳴湖、魚などの事を知れたので凄くためになった。なので来年も参加したいと思った。
- ・全員とても難しそうな研究をしていた。中には高校生も大人の中に混じって研究、発表をしていた。私の知らない所でどういうことが起こって、どのような活動がされているかを知ることができた。今、自分がいるこの地球のためにも私たちが地球を知り、行動していかなければならないと改めて感じた。まずは私の知らない所を知るためにもこういった活動に積極的に参加したいと思った。今回は少し難しかったけれど勉強になったので良かったと思う。
- ・すごくたくさんの方が聞きに来ていてびっくりしました。いろんな人達が来ていて、さまざまな発表をしていました。すごくおもしろいと思いました。

解説

今回参加した発表会は、中学生向けの内容ではなく、専門の研究者同士が議論する会合でした。そのため、中学生にはやや難しい内容が多かったと思いますが、参加した生徒は、参加者レポートにもあるとおり、多くのことを得てきました。特に、高校生の発表には年齢が近いだけに、「自分たちにもこのような研究ができるようになる」という意欲を高められたようです。参加した生徒の様子をみていると、内容は全て理解できなくても、専門の研究内容に触れることは、科学技術に対する興味・関心だけでなく意欲も高める効果があると思われれます。トップガンによる教育は、単なる英才教育ではなく、科学技術への意欲の芽生えがたくさん生じさせるにはどうしたらよいかを追求することが、より大切な目的となります。今回の訪問は、大学などの研究機関には、学校教育向けのプログラムを提供していただくという方法の他に、専門のミーティングに参加する機会をいただくということが有効な方策となるという事例になりました。

(小南陽亮)

コラム

《うなぎとトラフグ》

今回訪問先の東大水産試験場を40年ほど前に訪問したことがあります。そのときは土地柄、時節柄か、うなぎの研究が行われていました。静岡県とうなぎ出荷量が日本で一番の頃でした。時が移り、今回久しぶりにお邪魔したところ、今はうなぎの研究をしている人はいないと聞かされ、啞然としてしまいました。一方で、トラフグの遺伝子の解読が当実験場の主要研究テーマになっていました。最近、遠州灘沖でトラフグがよく獲れ、フグの名産地の下関へ出荷されているというニュースを耳にします。研究テーマ選定の本当の理由ではないことは承知しているのですが、こんな時代背景もあったのではと考えると愉快になります。

60年前にもこの地を訪ねたことがあったのですが、当時そこは水族館があり、建物が竜宮城の模したものでした。その頃の水族館に、うなぎやトラフグが展示されていたか記憶はありませんが、会えるかもしれないと期待していた乙姫様は間違いなく居ませんでした。

編集部より

トップガンでは、他機関、企業などへ学外講座の協力をお願いしています。これらの受入れ先は普段、小中学生の皆さんが立ち入るような建物の造りや活動内容となっていません。そのため、皆さんに怪我などないよう、そして楽しく学べるよう、多大な時間をかけて準備をし、受入体制を整えてくれるのです。

十分に講座を学ぶことはもちろんですが、貴重な経験をさせていただける機会に感謝の気持ちも感じてもらえることを願います。

そして、遠足のようなワクワクした気持ちも忘れずにね。